

# 動詞mmiAの生態と文法化

## ——ミャオ語文法ノート(4)——

キーワード：ミャオ語、TAKE、文法化

田 口 善 久

### 1. はじめに

#### 1.1 本稿の趣旨<sup>1</sup>

本稿は、羅泊河ミャオ語の動詞mmiA [ʔmi<sup>42</sup>] について、その生態を記述するとともに、一般的な文法化の視座の中でその位置づけを試みる。mmiAは次のような文において、2つの動詞句の連続における最初の動詞として現れる。この文は、動作者が「石を池の中へ投げた」ということを語るものである。このイベントの中心的動きを表す動詞はndoC「投げる」であり、その後が続く着点を導く文法化した動詞qoCである。そこで、それより前に登場するmmiAはどのような機能をもつかが問題となる。

- (1) niB danB siB -eB -tsoC mmiA huByyiA ndoC  
3 CLF 妻 DEM そこで MMI 石 投げる  
qoC ntronA vonB -loA.  
QO 中 池 PRT<sup>2</sup>

「彼の妻は石を池の中に投げ込んだ。」『馬鹿な男と賢い女の話』

また、mmiAは、動詞に分類されるべき特徴のほとんどすべてを示すが、単独の動詞で文を構成するという特徴は示さない。常に他の動詞が構成する句を後に従えて、連続した動詞構成の中でのみ分布する。したがって、通常の動詞とは異なった振り舞いをするものであり、文法化ということが問題となる。本稿の結論は以下のようなものである。

1. mmiAは本来「(手に) 取る」という意味の動詞であった。

2. mmiAは動詞としての機能は一部失って文法化しているようだ。TAKE義の動詞の文法化はさまざまな系統の言語で見られるが、mmiAもそのうちの一つである。

3. mmiAは、統語的振る舞いにおいては、動詞単独で文を構成するという特徴を失っただけで、その他はほぼすべて保持している。動詞の文法化連続体というものが仮定できるとして、mmiAは文法化の初期段階にあるといえる。

### 1.2 ミャオ語系諸言語におけるmmiAの同源語

mmiAは、他のミャオ語系諸言語、すなわち羅泊河ミャオ語が属する西部ミャオ語群（中国の学界における川黔滇方言、以下括弧内は同様）だけではなく、東部ミャオ語群（黔東方言）及び北部ミャオ語群（湘西方言）にも対応する同源語がみられる（表1参照）。ただし、その分布は地理的に西側に偏っているように思われる（再建形はRatliff（2010）によるPH=Proto-Hmongicのもの）。また、羅泊河ミャオ語の母音は不規則な対応に見える（期待形はa）<sup>3</sup>。他のミャオ語系諸言語における同源語の意義については比較材料として3.2節でふれる。

表1

PH	東部	北部	西部川黔滇	西部羅泊河	ブヌ語	パフン語	ショオ語
*?mũε	mɛl	meɪ	mual	?miA	—	—	—

## 2. mmiAの生態と機能

### 2.1 mmiAが出現する文の動詞句の構成

まず、mmiAの分布状況を見るために、テキストに出現したmmiAの文の構成を見てみる。言いさしを除く138例の文中での分布状況は表2のようである<sup>4</sup>。

mmiAの登場する文は、(a)のように、その大部分がその後にNP+VPという構成を従えていることがわかる<sup>5</sup>。(b)は(a)におけるNPが現れていない場合

であるが、NPが文脈上復元可能であると考えられる（NPは当該文以前の文に登場している場合と、当該文の文頭に提示されている場合とがある）。(a) (b)ともその後動詞句が続いているが、(c)はこの点で異なっており、mmiAがNPだけを従えて文が終わっている。

表 2

	数量	割合
(a) mmiA + NP + VP	112	0. 812
(b) mmiA + VP	20	0. 145
(c) mmiA + NP	6	0. 043
計	138	1

## 2.2 mmiAに後続するNPの役割

次に、mmiAに後続するNPの動詞の項としての意味的役割を見てみると表3のようである。以下ひとつずつテキストからの例文を用いて観察する。

### (a) mmiA + NP + VP

まず、mmiAの後に名詞句が現れる場合を検討する。

#### (a) (1) 後続動詞が表す動作の対象

このパタンが最も多い。動詞句全体の意義は、「～(NPの指示物)を…(後

表 3

文の構成	NPの役割	数量
(a) mmiA + NP + VP	(1) 後続動詞が表す動作の対象	54/112
	(2) 後続動詞が表す動作の道具	45/112
	(3) mmiA + qoC構成が表す動作の対象	7/112
	(4) 後続動詞が表す動作の行為者	6/112
(b) mmiA + VP	(1) 後続動詞が表す動作の対象	10/20
	(2) 後続動詞が表す動作の道具	2/20
	(3) mmiA + qoC構成が表す動作の対象	8/20
(c) mmiA + NP	mmiAの対象	6/6

続動詞の動作) する」というようになる。先に見た例(1)では、mmiAは後続動詞句ndoC qoCが表す動作「～に投げる」の対象を提示している。

- (1) niB danB siB -eB -tsoC mmiA huByyiA ndoC  
 3 CLF 妻 DEM そこで MMI 石 投げる  
 qoC ntronA vonB -loA.  
 QO 中 池 PRT  
 「彼の妻は石を池の中に投げ込んだ。」『馬鹿な男と賢い女の話』

話者は、mmiAの意義について「手に取る」という意味であると内省を報告する。しかし、その意味が文の伝達する主要な情報ではないことは、次の例からわかる。次の例は、例(1)の直前にある文である。

- (2) honA- niB caA-... niB danB siB khoA tuC llanA  
 そこで 3 改めて 3 CLF 妻 拾う 得る CLF  
 huByyiA qoC... tiB qoC teeAwib.  
 石 QO 取る QO 手  
 「そこで彼の妻は石を拾って…石を手を取った。」『馬鹿な男と賢い女の話』

この文から、例文(1)の段階では、石が動作主の手の中にあることは分かっており、改めて「手に取る」という動作を描写したとは考えにくい。つまり、ここでは、mmiAは、主として後続の動作の対象を提示しているように思われる。そこで、mmiAのこの機能を対象標識とよぶことにする。ただし、mmiAは対象を提示するだけでなく、いまだに「手に取る」という意味を保持している証拠もある。これについては5.5節で述べる<sup>6</sup>。

(a)-(2) 後続動詞が表す動作の道具

(a)-(1)とほぼ拮抗する数量で使用されているのが動作の道具としての役割である。動詞句全体の意義は、「～(NPの指示物)を使用して…(後続動詞の動作) する」というようになる。この場合、後続動詞がとりうる項以外の

項が文に導入されることになる。

- (3) teeBqwenAnonB honA- mmiA aAntenB hleA niB  
 その後                      そこで MI      刀              切る 3  
 -moA taAnbuAsenA, niB honA- daC -loA.  
 MO<sup>7</sup> 肝臓                      3      そこで 死ぬ PRT  
 「その後刀で山姥の肝臓を刺したら山姥は死んだ。」『山姥』

ここでは、動詞hleA「切る、殺す」の二つの項（顕在項としては表れていない動作者と、顕在項である山姥の肝臓という被動者）の他に、刀という道具が導入されている。また、この文においても、先行文脈ですでに刀で山姥を刺したということが述べられており、この文で改めて刀を手にする動作を述べる必要はないと思われる（最初のカンマまでの節の趣旨は、別のところではなく肝臓を刺したということにある）。mmiAの意義機能は、後続の動作に対する道具を導入することにあると思われる。この機能を「道具標識」とよぶ。

- (a)3) mmiA + qoC構成が表す動作の対象

ここでいうmmiA + qoC構成とは、mmiAと文法化した動詞であるqoCとの組み合わせ全体のことであり、これ全体が「～（NPの指示物）を～に置く」という意義を表す。(a)3)が他と異なるのは、後続する動詞qoCは単独では「置く」という意味を表すことはなく、この意味はこの構成全体によって表現されると考えられる点である<sup>8</sup>。

- (4) niB tsoC- mmiA tonBzronA qoC heeBntronA  
 3      そこで MMI      腰掛                      QO      中  
 qlonA ...  
 飼い葉桶  
 「彼はそこで腰掛を飼い葉桶の中に入れて…」『食人族』

- (a)4) 後続動詞の動作の行為者

量的には少ないが、NPの指示物が後続動詞の行為者となり、動詞句全体の意義が、「～(NPの指示物)に…(後続動詞の動作)させる」というようになる場合がある。この場合、mmiAは使役の標識のような機能を持つことになる。ただし、筆者のメインコンサルタント(現在70歳代)は、理解はできるが、違和感があると報告する。一方、テキストにおいてこの構成を発話したのは、5人の話者中若い話者(現在50歳代)一人であり、現在40歳代のコンサルタントも容認する。この構成は比較的最近の発展である可能性がある。

(5) jeB tsoC- mmiA niB muB ntanB ndzjiBdiA.

FLL そこで MMI 3 行く 叩く 唐臼

「それで彼に唐臼を踏ませている。」『藍秧地主と戦う』

(b) mmiA + VP

次に、mmiAの後に名詞句が現れない場合である。この場合、常にNPは文脈上復元可能である。

(b)-(1) 後続動詞が表す動作の対象

以下の文では、文脈上すでに現れている「穂積具」が復元可能である<sup>9</sup>。あるいは、mmiAの後に3人称の人称詞niBを入れてもよい。

(6) jeB nghaB muB lanC niB, danB qaAzanCntonC

FLL 下る 行く 見る FLL CLF 木工職人

-nonB tsoC- mmiA qweC qoC eeBtrenA aAqlonC.

DEM そこで MMI 掛ける QO CLF 棒

「(虎が)下りて行って見ると、その木工職人は(穂積具を)棒にかけた。」〈穂積具と虎〉

(b)-(2) 後続動詞が表す動作の道具

これもNPが現れていない場合であるが、ここでは、NP(aAciBtshuC)が対比を構成するため文頭に現れている。なお、NPをmmiAの後に配置し

てもよい。

(7) aAciBtshuC mmiA aC aAciBsoA.

上澄み液 MMI 作る チソ

「上澄みはそれでチソ（発酵液）を作る。」『豆腐作り』

(b)-(3) mmiA + qoC構成が表す動作の対象

ここでも、(b)-(2)同様、動作の対象であるNP (taAciB「汁（ここでは豆乳を指す)」)は文頭に現れている。NPをmmiAの後に配置しても容認される。

(8) taAciB mmiA qoC saA wenB tsoC- mmiA aAciBsoA

汁 MMI QO 上 鍋 そこで MMI チソ

truC.

入れる

「豆乳を鍋に入れて、チソを加える。」『豆腐作り』

なお、(b)の場合に、(4)の場合（NPが後続動詞が表す動作の行為者である場合）がないのは偶然ではない。これは、使役を表す文においては後続動詞の動作を行う行為者は一般に省略できないからである。以上のように、(b)におけるmmiAの機能は、(4)における使役的用法を除いて(a)の場合と同じであるとみなすことができる。

(c) mmiAの対象

mmiAが後続動詞を持たない場合である。これらの6例中、5例においては、動詞句全体の意義は、「～（NPの指示物）を与える」というようになる。これは、mmiAがいわゆる本動詞として機能している場合であると考えられる。

(9) jeB, kanB mmiA tsiA- senA nbliA taA tsiA- senA

FLL ISG MMI 三 CLF 米 加える 三 CLF

tshanB, ronA tsoC- tiB muB,...

粟 2SG そこで 持つ 行く

「三升のお米と三升の粟をあげるから持っていきなさい。」『卵から生まれた娘(二)』

(10) danB ronA honA- mmiA tsiA- lanB, danB ronA

CLF 2SG だけ MMI 三 両 CLF 2SG

nonA -loA pheC.

食べる PRT 半分

「(お上が兵士一人につき六両支給しているのに、) お前は一人につき三両しか与えずに、一人につき半分を着服したわけだ」〈貴州大戦〉<sup>10</sup>

残りのひとつは、「(手に) 取る」という意味と思われる。

(11) tsoC- mmiA trenA teeA- ndanC ntenB.

そこで MMI CLF NMZ 大きい 刀

「そこで (彼は) 大刀をつかんだ」〈貴州大戦〉

これは、民話であるテキストに登場するもので現在70歳代相当の話者によるものであるが、筆者のすべてのコンサルタントたちから、違和感が報告された。この用法は、少なくとも筆者のコンサルタントたちには認められない様子である。

### 2.3 後続動詞の性質

次に、後続動詞の性質について観察を行う (aとbの場合のみ考察する。後続動詞のないcは除外する)。まず、後続動詞として直後にどのような動詞が現れるか見てみると、直示動詞 (luB「来る」、muB「行く」) が現れる場合がかなり多いことがわかる (表4参照。表中、(3)については、mmiA + qoCで構文をなすとして、後続動詞はなしとした)。しかし一方、後続動詞が直示動詞のみという例はない (表中、後続動詞がluB/muBの場合はゼロ

になっていることに注意)。これは、(a)-(4)のような使役の場合を別とすれば、文全体としてNPが動作の対象や道具という解釈を受けるイベントを表現するはずだが、直示動詞だけではそのようなイベントを構成することが難しいということであろう。つまり、VPに直示動詞が現れる場合、イベントを構成する動作は直示動詞の後の非直示動詞により表現されていると考えられる。

次に、直示動詞を除外して後続動詞を調べてみた結果が表5である。NPが出現するか否かで後続動詞の性格に変化がないので、(a)-(1)と(b)-(1)をまとめて(1)、(a)-(2)と(b)-(2)をまとめて(2)、(a)-(3)と(b)-(3)をまとめて(3)とした。また、これに合わせて(a)-(4)を(4)とした(表4同様、(3)については、mmiA + qoCで構文をなすとして、後続動詞はなしとした)。

この表から、以下のような観察ができる。(1)(2)を通して観察されることは、すべての後続動詞が制御可能な動作動詞であることである。また、動作とqoC(着点)、動作と結果という組み合わせの2つの動詞の連続が後続する場合もかなり見られた。(4)の使役の場合には、puC「寝る」という制御可能動詞も現れるが、実際には、使役の場合には、6例中5例に直示動詞のmuBが現れる。この場合には、直示動詞がイベントを構成する動作(来る、行く)を表している可能性がある。

表 4

文の構成	NPの役割	後続動詞			
		luB/ muB	luB + 動詞	muB + 動詞	非直示 動詞
(a) mmiA + NP + VP	(a)-(1) 動作の対象	0	14	2	38
	(a)-(2) 動作の道具	0	10	3	32
	(a)-(3) mmiA + qoC	/	/	/	/
	(a)-(4) 動作の行為者	0	0	5	1
(b) mmiA + VP	(b)-(1) 動作の対象	0	1	1	8
	(b)-(2) 動作の道具	0	0	0	2
	(b)-(3) mmiA + qoC	/	/	/	/

表5

NPの役割	後続動詞	数量
(1) 動作の対象	制御可能動詞+qoC (動作と結果の場所): qweC qoC 「～に掛ける」など	12
	制御可能動詞+制御不可能動詞: hnuC daC 「刺す+死ぬ」など	3
	制御可能動詞: panA 「あげる」(20例) など	49
(2) 動作の道具	制御可能動詞+qoC (動作と結果の場所): coC qoC 「～に縛りつける」など	4
	制御可能動詞+制御不可能動詞: juC myaB 「注ぐ+消える」など	6
	制御可能動詞: ceeBpoA 「包む」など	37
(3) mmiA+qoC		15
(4) 動作の行為者	制御可能動詞puCなど	6

#### 2.4 mmiAの機能による分類

以上のような観察から、本稿は、mmiAを機能によって以下のように分類する。先行動詞とは、他の動詞に先行する環境にのみ生起する動詞を指す。その性格については、第4節で検討することにする。

##### (1) 先行動詞

- : (a) 対象標識「～(NPの指示物)を…(後続動詞の動作)する」
- : (b) 道具標識「～(NPの指示物)を使用して…(後続動詞の動作)する」
- : (c) 使役標識「～(NPの指示物)に…(後続動詞の動作)させる」

##### (2) 構成mmiA+qoC「置く」の先行形態素

##### (3) 動詞: 制御可能動詞「～(NPの指示物)を与える」

本稿では、mmiAは本来単独で使用できる動詞であったが、文法化によって本来の動詞としての特徴を失いつつあると考える。以下、第3節では、元の動詞の意義について考察し、第4節ではmmiAの文法化の度合いについて考察する。<sup>11</sup>

### 3. 想定される本来義

mmiAは、本来は「(手に) 取る、持つ」という意味の動詞だったのではないかと考える。その根拠を以下で述べる。

#### 3.1 話者の内省

mmiA+NP+VPという形式の文において、mmiAの意義を聞くと、話者は上記の想定したような意味である（漢語の拿と同じ意味という、あるいはミャオ語のtiB「持つ、取る」と同じであるという）という内省を報告する。もっとも、内省報告は証明力があるとは言えない。

#### 3.2 他のミャオ語の同源語の意味

羅泊河ミャオ語と同系の他のミャオ語にも、mmiAと同源の動詞があることはすでに述べた。このうち、少なくとも東部ミャオ語群と北部ミャオ語群の同源語には、通常の動詞としての用法がある様子である。これは、これらのミャオ語において古い情報（祖先情報）が保持されていることを示すものと考えて矛盾はない。それぞれ当該言語の辞書の記述を引用する（括弧内は筆者が付けた日本語訳）。

##### (a) 東部ミャオ語群（張1990：305）

【maib】 1. 撈取（すくいとる）：～vob dub撈取青苔（水草をとる） 2. （从坛子中）抓（かめの中から取る、つかむ）：～nenk vangd hxub lol hut nail nongx. 抓点腌菜来煮鱼吃（漬物を取り出してきて魚を煮て食べる） 3. 用、把、以（～を用いる、～を、～をもって）：～nenx ait dail vut, baib nenx ob liangl diut. 把他当好人，送他二两六白银（彼をよい人だと思って二両六の銀をあげた）。/～gib liod tit xongs. 用牛角代替铁钎（牛の角で鑿の替わりにする）

これを見ると東部ミャオ語の動詞maib（表1におけるme1）には、単独で使用できる用法があり、「取る、つかむ」という意味であること、さらには東部ミャオ語においても対象項を示す用法や、道具項を導入する用法があるらしいことがわかる。

(b) 北部ミャオ語群 (向1992: 149)

【拿(取る、持つ)】 1. meb: 把书~出来(本を取り出す)。Geud bent ndeud meb blongl lol.(本を取り出しなさい。)

ここから、北部ミャオ語の動詞meb(表1におけるme1)にも漢語の拿(取る、持つ)に相当する単独用法があることがわかる<sup>12</sup>。

### 3.3 一般的な文法化の道筋

文法化の類型論的な考察であるHeine and Kuteva (2002: 286-291)によると、TAKE義動詞の文法化については、以下のようなタイプの機能発展が一般に見られるとする(実例については第4節で述べる)。このうち、(1)使役、(5)道具、(6)被動者が、それぞれ、本稿(4)の機能、本稿(2)の機能、本稿(1)の機能に該当する。

TAKE ('to take', 'to seize') > (1) CAUSATIVE

TAKE ('to take', 'to seize') > (2) COMITATIVE

TAKE ('to take', 'to seize') > (3) COMPLETIVE

TAKE ('to take', 'to seize') > (4) FUTURE

TAKE ('to take', 'to seize') > (5) INSTRUMENT

TAKE ('to take', 'to seize') > (6) PATIENT

TAKE ('to take', 'to seize') > (7) H-POSSESSIVE

以上から、mmiAの本来の意義として、「~を(手に)取る、持つ」を想定することは十分支持され则认为る。

## 4. ミャオ語の先行動詞とはどのようなものか

### 4.1 動詞の特徴の欠落

2.4節で述べた先行動詞とは、羅泊河ミャオ語のための用語であるが、漢語における介詞あるいはcoverb、Kwa諸語におけるverbidなどの用語と同様の趣旨である(Li and Thompson 1974, 1976, 1981; Lord 1993, 2002)。つ

まり、ある環境において、典型的な動詞としての性質に変動をきたしていく連続体（これを文法化連続体とよぶ）に位置する動詞の一種である。それが他の動詞に先行する位置にあることからこのようによぶ。

ここでは、漢語やKwa諸語と比較しつつ、羅泊河ミャオ語のmmiAがどの程度典型的な動詞ではないのか検討する（以下では、筆者のメインコンサルタントが違和感を報告する使役用法は除外して考える）。Lord (1993)によると、Kwa諸語においては、TAKE義動詞の文法化によって以下のような典型的な動詞特徴の欠落やNPに対する制約が見られるという（p. 65ff）。

- (1) 単独で述語を構成できない
- (2) 屈折をもたない
- (3) 後続動詞との間に接続表現が入らない
- (4) アスペクトに制約がある
- (5) NPの定性 (definiteness) に制約がある

漢語において、本来「取る」という意義を持つ動詞から文法化した介詞「把」においても、上記の特徴のうち、少なくとも(1)(3)(5)は当てはまる (Li and Thompson 1974, 1976, 1981)。一方、ミャオ語においては、この中で当てはまるのは、(1)だけであり、(3)と(5)は該当しないと思われる<sup>13</sup>。このことを以下で検討する。

#### 4.2 単独では文を構成できない

まず、他の動詞と共に起らないで文を構成することはできないようである。これは、mmiAが統語的振る舞いにおいて通常の動詞と明確に異なる点である。以下の例はいずれも作例である。

- (12) \*aAjiAjiC ronA mmiA taCmaA.  
荷物 2SG MMI NEG  
(意図する意味：「荷物はもう持ちましたか」) 〈作例〉
- (13) \*niB mmiA penB ntoB -eB muB -loA.  
3 MMI CLF 本 DEM 行く PRT  
(意図する意味：「彼はその本を持って行った」) 〈作例〉

この意味を表現するには、動詞tiB「取る、持つ」を用いる。

- (14) aAjiAjiC ronA tiB taCmaA.<作例>  
 (15) niB tiB penB ntoB -eB muB -loA.<作例>

#### 4.3 接続表現の介入

ミャオ語の直示動詞luB「来る」は、2つの動作の順序を明示する場合に、2つの動詞の中間に現れる<sup>14</sup>。この場合、最初の動詞の行為者、または対象などの直示移動が含意される場合もあるが、そうでない場合もある。例えば以下のような例に見られるluBは、「水を入れる行為者」あるいは「水」が直示の基準点に接近するととれるが、単に水を入れることで（次の動作である）水で浸すということを行うと述べているだけとも言える。いずれにせよ、2つの動作を区切って順序を述べている。

- (16) tsonC onA luB tszBqaA niB, niB hluA -waC.  
 入れる 水 来る 覆う FLL 3 大きい PRT  
 「水を入れて（苗を）浸すと、（苗は）育つ。」『ミャオ族の米作り』

このluBがmmiAと後続動詞の間に介入するかどうかを見てみると、先に表4で見たように、この例が多数あることに気がつく。たとえば、次のような手順説明のテキストでは、luBが頻出する（斜体で表記）。

- (17) ntsheA -waC, mmiA hluAphaC *luB* nnenA, mmiA  
 澄む PRT MMI 布 来る 押す MMI  
 aAsuC *luB* qoC aAhluAphaC heeBsaA, mmiA  
 ざる 来る QO 布 上 MI  
 aAphiauA *luB* heA aAciBtshuC ndoC, ceeBpiC  
 瓢箪 来る 汲む 上澄み 捨てる 変る  
 teeAhuB -waC.  
 豆腐 PRT

「液が澄んできたら、布で（豆腐を）上から押して、ざるを布の上において、瓢箪で上澄みを掬って捨てると豆腐になる。」『豆腐作り』

ここでは、mmiAと後続動詞の間にあるluBは、「布を手にとって押し、ざるを手にとって置き、瓢箪を手にとって汲む」というようにそれぞれのイベントをさらに2つに切り分けているように見える。

#### 4.4 定性 (definiteness) 制約

動詞から文法化によって発達したと言われる漢語の前置詞「把」においては、対象の定性に制約があり、定的 (definite) でなければならないとされている (Li and Thompson 1974, 1976, 1981)。羅泊河ミャオ語のmmiAにおいては、この制約はないようである。たとえば、先の例(1)のNPは「(手に取った) 石」という同定可能な対象であるが、同定不可能なものも観察される。以下の例は闘牛のやり方を説明するものであるが、これより以前の文脈に牛への言及はないので、類別詞で表されている「一頭」は同定不可能な対象であると考えられる。

- (18) xienB mmiA danB aCciBdiA muB ... aCciBdiA  
 先に MMI CLF 先に 行く 先に  
 muB nganBtsuanB, honA- mmiA danB tsoC- qloB  
 行く 配置する そこで MMI CLF そこで 従う  
 pheC luB chiC luB szB-yiC honA- tsonC szA-ntroC.  
 CLF 来る 牽く 来る IRR-近い そこで 放す RCP-闘う  
 「まず一頭を先に行かせて配置し、それからもう一頭を一方から引いて行って、近づいたら放して戦わせる。」『ミャオ族の年越し』<sup>15</sup>

以上、mmiAについては、文法化によって欠落する動詞の特徴の中で、欠落しているものと保持しているものを見た。その結果、単独で述語を構成するという特徴以外は保持しているもののがかなりあることが分かった。さらに、ひとつ、意味的な特徴がmmiAにはあり、それが元の動詞としての意義

からくるものと思われる。次節でこの点にふれる。

#### 4.5 「手の」動作への関与

mmiAは、〈使役〉の用法以外の用法で、「手の関与」とでもいうべきものが見られ、対象が手に取ることが難しい場合には文が容認されない。これは、本来の動詞の意義から引き継いでいるものと考えられる。Lord (1993)によると、Dagbani語 (Gur, Ghana) においても文文化したTAKE義の動詞に同じことが観察されるという (Lord 1993: 128)

- (19) \*niB mmiA danB qoAloBnpoA -eB ntruA daC -loA.  
 3 MMI CLF 虎 DEM 打つ 死ぬ PRT  
 (意図する意味: 「彼はその虎を撃ち殺した。») 〈作例〉
- (20) \*niB mmiA aAtroA tshaA ntsheA -waC.  
 3 MMI 机 拭く 清潔だ PRT  
 (意図する意味: 「彼女は机を拭いてきれいにした。») 〈作例〉
- (21) \*niB mmiA trenA ntonC -eB ntuB ceeBqlonB -loA.  
 3 MMI CLF 木 DEM 切る 倒れる PRT  
 (意図する意味: 「彼はその木を切り倒した。») 〈作例〉
- (22) niB mmiA trenA ntonC -eB ntuB aC wwuA-  
 3 MMI CLF 木 DEM 切る 作る 二  
 ndonC.  
 CLF  
 「彼はその木材を2つに切った。») 〈作例〉

最後の2つの例は対比的で、例(21)は地面に生えている木であり、これを手に取って切り倒すことが不自然であるのに対して、例(22)では、すでに切り倒されている木を2つに切り分ける動作を表すので、手に取ることが不自然ではない。それが容認可能性に関する違いに現れていると考える。

以上の観察から、mmiAは、動詞連続の最初の動詞の位置において文文化し、単独の用法を失ったが、いまだに元の動詞「(手に) 取る、持つ」とし

での性格をほぼ保持していると言える。言い換えれば、「先行」環境にのみ生息する「普通の」動詞であるといってもよい。

### 【参考文献】

- Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- Heimbach, Ernest E. 1980/1966. *White Hmong-English Dictionary*. Ithaca: Cornell Southeast Asia Program Publications.
- Li, C.N. and S.A. Thompson. 1974. Coverbs in Mandarin Chinese: Verbs or Prepositions? *Journal of Chinese Linguistics* 2.3, 257-278.
- Li, C.N. and S.A. Thompson. 1976. Development of the Causative in Mandarin Chinese: Interaction of Diachronic Processes. *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*, Academic Press, New York.
- Li, C.N. and S.A. Thompson. 1981. *A Functional Reference Grammar of Mandarin Chinese*. University of California Press.
- Lord, Carol. 1993. *Historical Change in Serial Verb Constructions*. J. Benjamins.
- Lord, Carol. 2002. Grammaticalization of 'Give': African and Asian Perspectives. *New Reflections on Grammaticalization*. J. Benjamins. 217-235.
- Matisoff, James. A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. University of California Press.
- Ratliff, Martha. 2010. *Hmong-Mien language history*. Canberra, Australia: Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, in association with the Centre for Research on Language Change, the Australian National University.
- 田口善久 (2016) 「ミャオ語文法ノート～羅泊河ミャオ語の人称詞について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18 : 13-30。
- 田口善久 (2017) 「羅泊河ミャオ語の類別詞について～ミャオ語文法ノート(2)」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』19 : 1-18。
- 田口善久 (2018) 「羅泊河ミャオ語の場所詞について～ミャオ語文法ノート(3)」『千

葉大学ユーラシア言語文化論集』20印刷中。

向日征（編著）1992。《汉苗词典：湘西方言》四川民族出版社。

张永祥（主编）1990。《苗汉词典：黔东方言》贵州民族出版社。

## 注

- 1 本稿は、田口（2016、2017、2018）に続く、ミャオ語の文法に関するスケッチである。本稿を含む羅泊河ミャオ語の記述に関する企て、表記法等については、田口（2016）を参照していただきたい。羅泊河ミャオ語（Lan Hmyo）は、ミャオ・ヤオ語族（Hmong-Mien, Miao-Yao）のミャオ語系（Hmongic）に属する言語で、主として中国貴州省の開陽県、福泉市、貴定県、龍里県で話されている。
- 2 本稿の例文における略号は以下の通り。なお、各語の末尾にある大文字のアルファベット/A、B、C/はこの言語の3つの声調のいずれかを表す。  
1：一人称      2：二人称      3：三人称    CLF：類別詞  
DEM：指示詞   FLL：フィラー   IRR：未然    MO：修飾標識  
NP：名詞句     NMLZ：名詞化   PRT：助詞    QO：着点  
SG：単数        VP：動詞句
- 3 この語は、チベット・ビルマ系言語からの借用語の可能性もある。Matisoff (2003: 37, 602)には、ロロ・ビルマ祖語に\*s/?-mil (PLB) 'catch/overtake' という語が建てられている。
- 4 テキストは、貴州省開陽県高寨郷の3つの村出身の5人のネイティブスピーカー（40歳代から70歳代の男性）に語っていただいたもので、35篇ある。その内容としては、民話、手順説明、状況説明がある。語りのスタイルとしてはモノログとインタビューがある。本文中では、『 』でそれぞれのテキストのタイトルを示す。
- 5 NP、すなわち名詞句としているが、同じスロットには類別詞を主要部とする類別詞句も現れる。以下では、NPという表記で両者を合わせて表示することにする。
- 6 mmiAに後続するNPが後続動詞の対象の役割をはたす場合、当該イベントを、mmiAを用いずにNPを後続動詞の直後の位置に置くことで表現することも可能である。対象の標識として機能するmmiAを用いた文と、mmiAを

用いない文とでは、機能的に何が違うのか、という問題は本稿ではふれることができない。

- 7 -moAは、先行する句の後続句に対する修飾関係を表す助詞である。
- 8 qoCは単独の動詞としては、「～へ移動する」という制御不可能動詞である。ここで、制御可能動詞とは、行為者の意思によって行う動作を表す動詞であり、制御不可能動詞はその反対で概念である。制御可能性は、2人称の行為者の文を命令として解釈できるかどうか（制御可能動詞の場合はできる）、動作＋結果の組み合わせにおいて結果を表す動詞の前に未然標識szBが現れうるかどうか（制御不可能動詞は現れうる）などの区別に反映が見られる。4.1節に関連した話題がある。
- 9 穂積具とは、木製の三日月状の杵に刃を取り付けたもので、粟などの穂を刈るのに使う道具である。
- 10 羅泊河ミャオ語では、「一」という数量概念は類別詞単独で表現する。この文に2回登場しているdanB（+animateな対象を表す類別詞）は、ここでは兵士一人を表している。
- 11 それぞれの機能が生じた文法化の道筋については、また別の機会に考察したい。
- 12 羅泊河ミャオ語と同じ西部ミャオ語群に属するWhite Hmongの辞書であるHeimbach 1980には、同源語のmuabについて、to take in the hand「手に取る」という意味が記載されている。ところが、興味深いことに、あげられている例の方は、「与える」という意味の例と、本稿で論じてきたような動詞連続構成の例だけである。つまり、White Hmongにおいても、羅泊河ミャオ語と同様の文法化が発生しているのではないかと思われる。また、GIVE義動詞への発展が、西部ミャオ語群の一定深度の祖語の段階に遡ることも示唆する。これについてはさらなる研究を要する。
- 13 ミャオ語は、そもそも動詞に屈折はないので(2)は該当せず、また、(4)のアスペクト助詞も節末にのみ見られるので検証は難しいと思われる。
- 14 muB「行く」にも同様の機能がある。以下の例(18)を参照。
- 15 この例における最初のmmiAは、muB「行く」を後続動詞とする使役ともとれるが、その後にはnganBtsuanB「配置する」があるので、muBはmmiAとnganBtsuanBをつないでいると解釈する。2番目のmmiAの場合も同様で、luBの後にchiC「引つ張る」があるので、後続動詞chiCが類別詞で表されている「ある一頭」を対象項としていると考える。